

クリーヴランド美術館の様々なスタッフたち

主任研究官 内藤 榮

日本の美術館・博物館の職員は、展覧会や作品・資料にかかわる専門的な職務に従事する学芸員と事務系職員の二種類に分かれているのが一般的である。博物館で専門的な仕事に就きたいと思う人は大学等で「学芸員資格」を取得しなければならないように、博物館の専門的な職員といえば学芸員、ということになっている。しかし、これは世界的な視座で見れば特殊なことかもしれない、とこの夏から思うようになった。

平成10年夏、アメリカ・オハイオ州のクリーヴランド美術館でBuddhist Treasures from Nara（日本名「仏教美術名品展」）が開催され、私は作品に随行して日航のカーゴ便に乗り込み、同館スタッフとともに展示作業を行った。このおり日本の美術館ではお目にかかれなような美術館スタッフに会うことができた。

まず、展覧会に先立ち、作品の点検・梱包のために来日したのがコンサバター（conservator）であった。コレクションの状態の把握、修復、保管を主な仕事とし、作品の移動に随行することも多い。日本では他の美術館等から出品の依頼があった場合たいてい学芸員が可否を検討するが、アメリカではコンサバターの意向が強く反映するようだ。大学で美術史と実技を学びコンサバターをめざす人も多いそうで、博物館の専門家といえば学芸員しかいない日本とは違う。ちなみに日本では修復は館外の業者に委託するのが一般的である。そして、作品に随行した我々を美術館で迎えてくれたのはレジストラー（registrer）であった。レジという言葉から連想されるように記録係であり、作品の移動を常に記録に留め、展示作業中もギャラリーで開梱の状況をポラロイドカメラで細かく記録していた。美術館についた荷はアートハンドラー（art handler）たちによって運搬された。日本ならば日本通運やヤマト運輸の美術専門の作業員といったところであろうが、自前である。展示会場の順路や会場装飾はデザイナー（designer）が設計し、ケースはデザイン部で制作され、アートハンドラーたちの手によって据え付けられていた。作品の開梱はレジストラーの注視のもと、梱包を専門とするパッカー（packer）によって行われ、作品の状態チェックを我々日本側の学芸員とコンサバターが行った。そして、展示ケースの中での展示方法（つまり位置決め）はデザイナーが行い、照明もデザイナーの指示のもと照明係が行う。また、デザイン部には作品を固定したり支えるなどの備品や題箋を作る専門のスタッフもあり、とくに備品制作のスタッフは高度なテクニックを持ち、我々を羨ましがらせた。このほか、図録等の出版部、絵画の額専門の係、営業や企画に携わるDevelopment部などがあることを知った。これまで学芸員（curator）の名前が出てこなかったが、作品のリストアップや作品解説の執筆など展覧会にかかわる準備を学芸員が主体となって行うのは日本と変わらない。

このような徹底した分業体制は美術館界に限らずアメリカ社会の特徴なのであろう。それにひきかえ、日本の学芸員はコンサバターのように収蔵品の保管をし、レジストラーのように作品の移動を記録し、デザイナーのように展示を行い、図録を編集し、パッカーやアートハンドラーの仕事もこなす。確かに「雑芸員」と言われるくらい雑務が多い。しかし、忙しい忙しいと文句を言いつつ、やはり展示作業は学芸員の腕の見せ所であり、図録編集、梱包作業などもやってみると楽しい。これを取り上げられたらきっと寂しいだろうな、と感じた。なお、日本では他館より作品を拝借するとき借りる側の学芸員が美術品梱包業者の車などに便乗して出向くものだが、これをクリーヴランドのコンサバターに話したところ大変驚かれた。貸す側が出向くもので、借りる側が行くなんて聞いたことがないという。これも新発見のひとつ。



ケースにアクリルをはめるパッカーとデザイナー

予 告

春季特別展 ひじり いん じゃ 「聖と隠者 ―山水に心を澄ます人々―」

4月27日(火)～5月30日(日)

都市や寺院を離れて山林に住み、仏道修行に励んだり詩歌の制作に打ち込むことは、日本の長い歴史を通じて常に重要視されており、美術や文学の主要なテーマとなっており、多くのすぐれた作品を生み出してきました。この展覧会は、飛鳥時代から室町時代にかけての絵画作品を中心に彫刻・書跡・工芸の名品も集め、中国を視野に入れつつ、自然のなかに生きる人間の姿を見つめ、先人の求めた世界を深く味わう機会とします。